

8月1日（木）事例検討「ケース会議実践」

講師 星槎大学大学院教育学研究科博士後期課程専任教授
星槎大学大学院教育実践研究科専任教授 芳川玲子先生



「ケース会議をしたけれど、事例提供者の悩みを聞くだけで終わってしまった」「情報共有に留まらないケース会議にするためにどうしたらいいのか」など、参加者からいただいた悩みをもとに、研修が始まりました。講師である芳川先生からは、「児童の良さや可能性を伸ばす」という児童理解の視点や目的、ケース会議をどのように進めたらいいのか、ケース会議の留意点などを具体的にわかりやすくご指導いただきました。

研修のはじめに、芳川先生から、児童理解をする上で大切な知識を、さまざまな視点から教えていただきました。問題行動などの氷山の見えている部分でなく、本人の特性や環境など水面下の要因に目を向けることが大切であること（氷山モデル）、児童の問題行動は「問題提起行動」と捉え、子どもの「心の危機の叫び」とする視点が大切であることなどのお話がありました。また、ピアジェの認知発達理論をもとに、小学生には発達段階ごとにどのような特徴があるのかもお話がありました。そのほか、子どもを理解する上で大切な知識として、生理・心理・社会モデルによる理解、環境との相互作用からの理解、SEL（対人関係能力育成）、ストレスマネジメント教育、多要因決定論などにも触れていただきました。次に、事例についてグループごとに考えました。参加者は、シートや模造紙を活用して、シートに情報を書き込んだり、模造紙で視点を整理していったり、児童・生徒が何で困っているのかを考えました。また、困っていることだけでなく、よくできていることや苦手なことについても整理していきました。そこで考えた見立てから実際にできそうな手立てを出し合い、誰が何をするのか、役割分担をしていきました。



～参加者からの感想～

- ケース会議の具体的な進め方を知りたかったので、事例を扱ってのケース会議実践はとても勉強になりました。同じグループの先生方が次々と意見を出してくださり、活発に議論をすることができました。さらに、芳川先生の見立て・考え方に「なるほど...」と言葉をなくしてしまいました。
- 芳川先生のお話が、とてもためになりました。問題行動をする子たちは、行動だけに注目するだけではなく、背景をしっかりと捉えることが大事であることを再認識しました。
- 児童の実態を多要因的と捉え、見立てて仮説を立てる大切さを理解することができました。グループワークでは、多様な捉え方が集まり、とても参考になりました。

（文責 下平間小 岸根）